

プラトンにおける知識とドクサ

——『国家』V 巻を考察の中心にして¹

福田 宗太郎

「哲学者たちが国々において王となって統治するのでない限り」とぼくは言った、「あるいは現在王と呼ばれ、権力者と呼ばれている人たちが、真実にかつ十分に哲学するのでない限り、すなわち、政治的権力と哲学的精神とが一体化されて、多くの人々の素質が、現在のようにこの二つのどちらかの方向へ別々に進むのを強制的に禁止されるのでない限り、親愛なるグラウコンよ、国々にとって不幸のやむときはないし、また人類にとっても同様だとぼくは思う。」(『国家』, 473C11-D6)²

1. はじめに

哲学者が王となるか、権力者が哲学をするのでなければ、国々においても人類においても不幸が止むことはない、とソクラテスは主張する(473C-E)。では哲学者とはどのような人なのか。ソクラテスはまずイデア論に基づき哲学者と(哲学者に似ているとされる)見物愛好家たちを区別し、前者は知識をもつが後者は思わくを抱いていると論じる(475E-476D)。しかし見物愛好家たちはそもそも「美それ自体」と呼ばれるイデアを認めず「いろいろの美しい事物」しか認めない。そのためイデア論に基づいて見物愛好家たちは思わくを抱いているのだと批判しても、見物愛好家たち自身がその批判を受け入れるよう

¹ 本稿は、2012年9月15日、16日に大学コンソーシアム京都にて行われた古代哲学フォーラム第40回大会(大会テーマ:プラトン『国家』)での発表原稿を加筆修正したものである。

² テキストはOCTの新版を用い、翻訳は藤澤訳を適宜改変している。

には思われぬ。ソクラテスはグラウコンを対話相手にして、見物愛好家たちが知識ではなく思わくの状態にいることを説得的に論じることを試みる(476D-E)。

知識と思わくを異なる能力として区別して、哲学者は知識を見物愛好家たちは思わくを抱いていると論じるこの箇所の議論(476E-480A)は、いわゆる「二世界説(Two Worlds Theory)」を帰結するものとして議論の対象とされてきた。「二世界説」とは Fine によれば、知識はアイデアだけに成立し、思わくは感覚物だけに成立するというものである³。ここでは異なる能力について、それが関わる対象と、それが成し遂げる内容が異なることが論じられている(477B-478E)。そのため知識と思わくが異なる能力だと想定するならば、知識が関わる「あるもの」——アイデアを示唆する——と思わくが関わる「ありかつあらぬもの」——いわゆる感覚物——は異なるものであり、知識と思わくはそれぞれ異なる対象に排他的な仕方に対応することになってしまう。

けれども『国家』内部においても知識と思わくがそれぞれ別の対象に排他的な仕方に関わっているようには思われぬ。たとえば善のアイデアをみた哲学者は洞窟の中の事物についてそれが何であるかを識別すると語られている(520C)。また善のアイデアについてソクラテスは、自分自身は知識をもたず思わくを持っているのだと語っている(506C)。これらの箇所は、知識が感覚物に関わること、思わくがアイデアに関わることもあり得ることをはっきりと告げている。

以上の事情を考慮した Fine は、ここでの「ある」はアイデアを示唆する存在や実在の意味ではなく、「真である」を意味するとみなす解釈を提示した。この Fine の解釈それ自体は、多くの論者が認めているように、Gonzalez による詳細な批判によって斥けられたと言ってよいと思われる⁴。

しかし 知識が実際には「ありかつあらぬもの」を対象にとることや、思わくが「あるもの」を対象にとることは、どうして成立するのか。この「二世界認識論(Two Worlds Epistemology)」とでも呼ぶべき問題を解消するために解釈者たちがとるアプローチは、Fine 自身のものも含めておおむね以下の三つの

³ Fine[1], 66.

⁴ Gonzalez, 262-271.

⁵ Fine は「二世界説(Two Worlds Theory)」の名の下に、アイデアと個物の関係について成立する存在論と、知識と思わくの対象について成立する認識論を包含させている。Fine 自身は、ここでの「あるもの」がアイデアを示唆することは直ちに知識と思わくの対象が完全に異なることを帰結すると考えている。しかし Fine に反対して「あるもの」がアイデアを示唆することを認める論者は、もちろん 前者の存在論は認めるが、そのことが後者の認識論を導くということ是否定する。そのため存在論と認識論は区別して論じられる必要がある。それを明確にする上で、Smith (152-153) が用いる「二世界認識論(Two Worlds Epistemology)」という言葉は有用であろう。

形をとる。

A. 「あるもの」と「ありかつあらぬもの」の再検討 (Fine, 岩田)

Fine がとったアプローチであるが、もし知識が対応する「あるもの」がアイデアを意味しないならば、知識がアイデア以外のものに関わることは認められるだろう。思わくについても同様である。

B. 知識の再検討 (Gonzalez, Baltzly)

ここで論じられている知識が、ある事柄についての「何であるか」の知であるならば、必ずしもすべての知識が「あるもの」を対象にしなければならない訳ではない。たとえばある行為が正しいか否か知るといふ事実についての知識は、ここで問題となるような知識ではない⁶。

C. 認識能力と対象の関係の再検討 (Smith)

知識と思わくが異なる能力であって異なる対象に関わるという規定は、知識や思わくの具体的な認知内容の対象が異なることを意味しない。

本稿の目的は C.のアプローチをとることで「二世界認識論」を解消すること、その上でここでの知識と思わくの区別がどのような意義をもつかを考察することにある。具体的には、まず A.のアプローチも B.のアプローチもテキストとは整合しないことを指摘する。そして C.のアプローチをとる Smith の解釈を批判的に検討し、Smith とは異なる根拠から C.のアプローチを正当化する。知識や思わくの具体的な認知内容や、両者が対応する「あるもの」や「ありかつあらぬもの」の身分については、先行研究を批判的に検討していく過程で明らかにしていきたい。

2. テキストの概観

まずは、考察の対象にする議論 (476E-480A) のおおまかな流れを確認したい。議論全体は大きく分けて三つの議論 (E1-3, D1-6, P1-4) によって構成されていると考えられる。

⁶ Gonzalez, 258, 271.

〈知識と「あるもの」〉(476E4-477B3)

- E1 完全に「あるもの」(τὸ μὲν παντελῶς ὄν)は完全に知られ得るものだが、まったく「あらぬもの」(μὴ ὄν δὲ μηδαμῆ)はまったく知られ得ないものである(477A2-4)
- E2 もし「ありかつあらぬもの」(εἶναι τε καὶ μὴ εἶναι)があるとすれば、純粹に「あるもの」とまったく「あらぬもの」の中間に位置づけられる(477A6-8)
- E3 「あるもの」には知識が対応し、「あらぬもの」には無知が対応し、「ありかつあらぬもの」には知識と無知の中間にあるものが対応する(477A10-B2)

〈異なる能力としての知識と思わくの区別〉(477B4-478E6)

- D1 〈O〉いかなる対象に関わるかと〈C〉何を成し遂げるか、によって能力は区別される(477D1-3)
- D2 知識は「誤り得ない(ἀναμάρτητον)」が思わくは「誤り得る(μὴ ἀναμαρτήτω)」(477E7-8, 〈C〉の区別)
- D3 D1とD2から、知識と思わくは異なる能力である(478A1-2)
- D4 D1とD3から、知識と思わくは本性上それぞれ別のものに関わる(478A4-5, 〈O〉の区別)
- D5 思わくが向かうのは、「あるもの」でも「あらぬもの」でもない(478C5)
- D6 D5とE3から、思わくは知識でも無知でもなく、両者の中間的なものである(478D3)

〈見物愛好家たちが愛する多くのものは「ありかつあらぬもの」〉(478E7-480A13)

- P1 アイデアを認めない見物愛好家たちが愛好する多くの事物は「ありかつあらぬもの」である(478E1-479D5)
- P2 見物愛好家たちは、知っているのではなく思わくしている(479D6-E8)
- P3 アイデアを観得する人たちは、思わくしているのではなく知っている(479E6-7)

P4 アイデアを観得する人たちは、知が関わる対象を愛好し、見物愛好家たちは思わくが関わる対象を愛好する(479E-480A1)

E1-E3 の議論では、まず知識と無知について対象と認識様態の対応関係が確認される。「あるもの」に対応するのは知識であり「あらぬもの」に対応するのは無知である。そして、もし「ありかつあらぬもの」があるならば、それに対応する認識様態は知識と無知の間にあるものだということが導かれる。そのため、ここでは「ありかつあらぬもの」の存在はまだ明らかにされてはおらず、それに対応する知識と無知の中間的な認識様態が何であるかも示されていない。「ありかつあらぬもの」の存在は P1 で明らかにされ、知識と無知の中間的な認識様態が思わくであることは次の D1-D6 の議論で提示される。

次の D1-D6 の議論では、知識と無知の中間的な認識様態として思わくが導入される。このとき思わくと知識が異なる能力であるということが確認されて、知識の対象と思わくの対象が異なることが導かれる。ここで思わくが知識と無知の中間的な認識であることから、その対象は「あるもの」と「あらぬもの」の間にある「ありかつあらぬもの」であることが予想される。

最後の P1-P4 の議論では、実際に思わくの対象であると考えられる「ありかつあらぬもの」の存在が論証される。それは見物愛好家たちが愛好する多くの事物であることが確認されて、彼らは知っているのではなく思わくしていることが導かれる。

3. 「あるもの」と「ありかつあらぬもの」は何か: A. の検討

E1-E3 に登場する「あるもの」がアイデアを示唆する存在や述定を意味するのではなく、「真である」を意味すると理解する Fine の主要な根拠は、Dialectical Requirement (以下, DR) にある。ここでの議論が見物愛好家たちを説得するものである以上、議論は彼ら自身が受け入れる主張を用いなくてはならない(DR)⁷。「あるもの」がアイデアであり「ありかつあらぬもの」が感覚的事物であるといった主張は、知識が関わるものが「あるもの」であり思わくが関わるものが「ありかつあらぬもの」だと言われている以上、知識と思わくの対象が異なるという帰結を導く。だが、そのような主張がアイデアを認めない見物愛好家たちによって受け入れられるとは思われない。そのため「あるもの」はイデ

⁷ Fine[2], 87.

アを示唆する存在や述定の意味ではなく「真である」の意味で読まなければならないと Fine は主張している⁸。

しかし Fine の強調する DR は本当にここでの議論に適用されるのだろうか。対話相手であるグラウコンが見物愛好家たちの忠実な代弁者であるという想定には疑問がのこるように思われる。まず注意すべきなのは、見物愛好家たちはそもそも哲学的な議論にたずさわろうとはしないと言われている(475D1-E1)ことである。見物愛好家たちの代弁者となるグラウコンはいくつかの論点について簡単にソクラテスに同意しているが、見物愛好家たち自身がグラウコンのようにここでの議論の内容を理解して同意するとは思われない⁹。実際のところ、見物愛好家たち自身の見解を明確にしたいときにソクラテスは、グラウコンにではなく見物愛好家たち自身に直接問いかけているのだ¹⁰(478E7-479A7)。

以上のことから見物愛好家たちを説得する議論は二段構成になっていると考えられる。ソクラテスはまずグラウコンを相手に議論を行い(E1-3, D1-6), そこでの議論を踏まえた上で、見物愛好家たち自身を相手に議論を行っている(P1)。そのため見物愛好家たち自身に問いかけている以上、P1 についてはたしかに DR を適用しなくてはならないだろう。けれども、グラウコンを対話相手にした前者の議論が厳密には見物愛好家たちの認めないような主張によって構成されていたとしても、それは問題にはならない。そもそも哲学的な議論にたずさわろうとしない見物愛好家たちが、ソクラテスの議論をきちんと理解した上で同意する保証はないのだから。DR はここでの議論の展開を考えたとき、議論全体に適用できる原則ではないのだ。

とはいえ、アイデアの存在が E1-3 と D1-6 の議論においてすでに前提されていると考える必要もまたないだろう。「あるもの」がアイデアを指すということは、見物愛好家たちが愛好する多くのものが「ありかつあらぬもの」であることが論じられた後に語られるからだ¹¹(479D10-480A13)。そのため E1-3 と D1-6 の段階では、「あるもの」がアイデアを指すということは、ひとまず保留にしていると思われる。では E1-E3 における「あるもの」は基本的には何を意味しているのかだろうか。

⁸ Fine[1], 70, [2], 87-89.

⁹ cf. Halliwell, 214.

¹⁰ N. P. White (106, n. 9) も同様の指摘している。

¹¹ Fine と同様に A のアプローチをとる岩田は、Fine とは異なり、「あるもの」がアイデアだけでなくいわゆる内形相も指すと理解する。けれども議論の後半部では「あるもの」がアイデアを指していること、さらに「あるもの」が「完全に(παντελής)」(E1)や「純粋に(eiAυρινωός)」(E2)という副詞をともなっていることを考えると、E1-3 と D1-6 に登場する「あるもの」にあえて内形相を含ませることは難しいように思われる。

P1 で多くの事物が「ありかつあらぬもの」だと論じられる箇所では、「ある」や「あらぬ」ということは述定の意味で用いられている。多くの美しいものは美しいとも醜いとも現れることが確認されて(479A5-b1), このことから多くの事物は「あるもの」と「あらぬもの」の中間にあると断定されている(479C6-9)。P1 の議論における「ある」の意味が以上のようなものである限り、E1-3 における「ある」の意味を「真である」の意味にとりわけ限定して理解することは文脈上どうしても不自然だと言わざるを得ない。そして多くの論者が指摘するように、「ある」を存在の意味にとると、「ありかつあらぬ」の意味が「存在しかつ存在しない」となってしまう意味をなさない¹²。そのため「ある」の意味は基本的には「Fである」の意味だと理解しなくてはならない。

そうすると「あるもの」と「ありかつあらぬもの」の違いは、「Fである」と呼ばれる場合に限定や制限が付与されるか否かによって説明されると理解できるだろう。たとえば、美しい人は(他の人に比べると)美しくあるが、(神々に比べると)美しくあらぬ、というように¹³。完全に「あるもの」は観点や比較対象の限定や制限なしに「Fである」が、「ありかつあらぬもの」はそのような限定や制限を加えられて「Fである」ため、異なる別の状況におかれたときには「Fであらぬ」ように現れる¹⁴。

4. 知識と思わくはどのような認識か: B.の検討

B.のアプローチをとる論者たちは、ここで問題となる知識が「何であるかの知」であると限定することで、知識が「ありかつあらぬもの」に関わる可能性を確保する。彼らの主張を要約するならば、知識が「あるもの」に対応し思わくが「ありかつあらぬもの」に対応するという意味は、知識は「あるもの」——イデア——が F の本質だとする認知状態であり、思わくは「ありかつあらぬもの」——感覚的事物——が F の本質だとする認知状態だとなるだろう。

B.のアプローチについて検討する前に、すでに確認した「あるもの」と「ありかつあらぬもの」の違いを踏まえて、ここでの知識と思わくの具体的な認知内容をみてみたい。それらは詳しく語られている訳ではないが、以下の発言が考察のヒントになるだろう。

¹² Vlastos, 65-66, Annas, 196-197.

¹³ Baltzly, 254-259.

¹⁴ cf. Vlastos, 66-73.

D2 知識は「誤り得ない」が思わくは「誤り得る」(477E7-8)

D7 知識は「あるもの」を対象にして、「あるもの」がどのようにあるかを知る(478A7)

P5 多くの事物は、どちらにでもとれるような性格のものであって、あるとも、あらぬとも、そのどちらであるとも、どちらでもないとも、しっかりと固定的に考えることはできない(479B10-C5)

まず注目すべきなのは、D2 である。この説明は、知識が対象について常に真なる認識をもつこと、思わくは対象について真なる認識も偽なる認識ももつことを意味している。D2 が知識と思わくが異なる能力であることの根拠となっている以上、この点は最大限考慮する必要がある。

そして「ありかつあらぬもの」である多くの事物は固定的に考えることが出来ない(P5)ということは、反対に「あるもの」は固定的に考えることが出来るということの意味する。そのため知識が「あるものがどのようにあるかを知る(D7)」ということは、対象とするアイデアを固定的に考えるということだとみなせるだろう。つまり知識が美のアイデアを対象にすると、それは「美のアイデアが美しくある」と認識するのだ。他方で思わくが多くの美しい事物を対象にするときには、「ある美しい事物が美しくある」と認識するとみなせるだろう。このとき思わくの認知内容は真である。だが思わくの対象となる多くの美しい事物は「美しくあらぬ」と現れる場合があるため、その場合には「ある美しい事物が美しくある」という認知内容は偽となる。

ここまで見た限り、知識と思わくの具体的な認知内容は、それぞれ別個の対象についてのものだとみなされる。しかしそうであるならば、なぜ知識と思わくの違いは「何であるかの知」に対する認識の相違として理解できるのか。たとえば Gonzalez は、「X が F である」といったとき重要なのは主語である X よりも属性である F であることを強調する¹⁵。また Baltzly は、完全に「あるもの」というのが「F が何であるか」という問いに対しての答えになることを、『国家』以外の対話篇も参照しつつ論じている¹⁶。知識と思わくの区別は、「F が何であるか」の答えとして、アイデアがそうであるとはっきりと認識しているか、感覚的事物がそうであると混乱した認識をいだいているかによって与えられる。このような

¹⁵ Gonzalez, 254.

¹⁶ Baltzly, 248-260.

知識と思わくの区別を擁護するために Gonzalez が強調するのは、哲学者は目が覚めているが見物愛好家たちは夢をみている(476C-D)という記述である¹⁷。

しかしながら、B.のアプローチのように、ここでの知識や思わくを限定することは難しいと思われる。たしかに哲学者の認知状態を覚醒に見物愛好家たちの認知状態を夢見に喩える発言は、知識と思わくの違いを同一の事柄についての認知状態の程度差によって示している。けれども知識と思わくを覚醒と夢見に喩える発言は今問題にしている議論の前になされている以上、やはり文脈が異なると考えなくてはならない¹⁸。この議論では、知識は「誤り得ない」が思わくは「誤り得る」と言われている(D2)。このD2は、すでに確認したように、知識の認知状態は常に真であるが思わくの認知状態は真でも偽でもあるというように、認識がはっきりとしているか混乱しているかといった認知状態の程度差を意味してはいない。さらにD2は単に認知状態の区別をするだけでなく、同時に、そのような個々の認知状態を成立させる認識の傾向性を示唆している。すでに強調したようにD2が知識と思わくが異なる能力であることの根拠となっている以上は、D2が意味する知識と思わくの規定の方こそ重視するべきだろう。

また知識と思わくが異なる対象に対応するということが、両者が異なる能力であるという前提から導かれている(D1-D4)ことは、知識と思わくを「Fが何であるか」という認識に限定することが出来ないことを示唆している。というのも、仮にここで論じられる知識と思わくが「何であるか」という問いに対する認知状態の違いに限定されるならば、知識と思わくが異なる能力であるという前提もまた限定されることになるからである。しかしそのような限定は不合理であると思われる。なぜなら能力の規定も限定されていると考えると、知識が感覚的事物を対象にするときや、思わくがアイデアを対象にするときには、知識と思わくは異なる能力ではないと考えなければならなくなるからである。

5. 認識能力と対象の関係:C.の吟味

4章でみたように、知識が「あるもの」に思わくが「ありかつあらぬもの」に対応することは、知識と思わくが異なる能力であること、異なる能力は異なる対象

¹⁷ Gonzalez, 256-257.

¹⁸ Gonzalezは両者の記述内容の違いを自覚した上で前者の記述を重視しようとするが、それはむづかしいだろう。

に関わることを前提にして論じられている。そのため知識がアイデア以外のものを対象にとることや思わくが感覚物以外のものを対象にとことは、ここでの能力と対象の規定を再考することでしか解決されないだろう¹⁹。

C.のアプローチをとる Smith は、認識能力の本性的な対象と認知内容の対象を区別することを提案する。この区別は概念的ですがこしわかりにくいですが、視覚について Smith が挙げる具体例をみてみよう。

たとえば視覚能力 (the power of vision) がキティーというウサギと接触すると、ある種の感覚的な信念 (a certain perceptual belief) が生じる。正常な状況であれば、この信念はキティーにかかわり、「キティーがマットの上にいる」といった信念を形成する。けれどもキティーを見ているにも関わらず、それとは異なるウサギであるミッフィーを見ていると思ひ込み、「ミッフィーがマットの上にいる」と考えることはあり得る。そのため視覚能力に関わるものはキティーではあっても、視覚能力によって生み出される認知内容の対象はキティーである場合もミッフィーである場合もあり得る²⁰。

このように認識能力の対象と認知内容の対象を区別する Smith は、知識が本性的に「あるもの」に対応するということは、知識という認識能力が「あるもの」に対応するということに過ぎず、個々の知識の内容の対象は「あるもの」にも「ありかつあらぬもの」にも関わると主張する。思わくについても同様の説明を行っている²¹。

しかし Smith の挙げる例は不適切であり、認識能力の対象と認知内容の対象が異なると言えるかは疑問である。なぜなら Smith の例は、視覚という認識能力の対象と視覚とは異なる認識様態である信念 (belief) の対象が異なることを示しているだけであり、同一の認識様態について認識能力の対象と認知内容が異なることを説明していないからである。

また仮に Smith のいうように、能力の対象と認知内容の対象が区別できたとしても、能力の対象は固定化されているため、知識が「ありかつあらぬもの」に関わることや思わくが「あるもの」に関わることを、誤同定として理解しなくてはならなくなる。たとえば Smith の具体例における認識能力の対象と認知内容の対象の関係をここでの文脈に適用した場合、「ありかつあらぬもの」に向

¹⁹ 「ありかつあらぬもの」は思わくの対象であるが、すべての思わくの対象が「ありかつあらぬもの」であると言われている訳ではないので、思わくは「ありかつあらぬもの」以外も対象にするといった見解もある (Murphy, 120)。けれども、そもそも「ありかつあらぬもの」が思わくの対象であると言われた根拠が異なる能力は異なる対象に関わるという D1 にある以上、そのように理解することは難しいだろう。cf. Santas.

²⁰ Smith, 148-149. Smith が挙げる具体例は、フリックスとシルベスターという猫のキャラクターであるが、日本ではあまりなじみがないように思われたので、ここではウサギのキャラクターに置き換えた。

²¹ Smith, 152-153.

けられている思わくは、それがアイデアであると思い、「あるもの」に向けられている知識は、それが感覺的事物だと思ふということになる。しかし Smith 自身も強調するように、哲学者が感覺的事物に目を向けるとき、哲学者はアイデアに照らして感覺的事物はその模像だと認識する(520C)²²。このような内容の認識についても、認識能力の対象がアイデアだけであると考えことはやはり不自然だろう。

そのため認識能力の対象と認知状態の対象を区別することでは、「二世界認識論」という問題は解消しない。むしろ Smith は否定的であるが²³、ある認識能力が本来対応するはずのない対象に関わるということがどうして成立するのかを考えてみる必要があるだろう。

Smith も着目していた「本性的に(πέφυκε, 477B11, 478A4, 14)」という言葉に注意を向けてみたい。知識と思わくが異なる能力であってそれぞれ異なる対象に関わると論じられている箇所では、知識が「あるもの」に対応することは「本性的」にと語られている。知識と「あるもの」の対応関係が「本性的」なつながりであることは、それ以外のつながりがまったく不可能であることを意味しない²⁴。

たとえば、『国家』X 巻では詩が関係をもつ心の部分を明らかにする文脈で以下のように語られている。

「感情をたかぶらせる性格のほうは、いくらでも種々さまざまに真似て描くことができるけれども、他方の思慮ぶかく平静な性格はといえば、つねに相似た自己を保つがゆえに、それを真似て描くのは容易ではなく、またそれが描写された場合にも、そうやすやすと理解されるものではない(中略)だから明らかに、真似を事とする作家(詩人)というものは、もし大勢の人々のあいだで好評を得ようとするのなら、本性的にはけっして魂のそのような部分に向かうようには出来ていないし(οὐ πρὸς τὸ τοιοῦτον τῆς ψυχῆς πέφυκέ)、また彼の知恵は、けっしてその部分を満足させるようにつくられてはいない。彼が向かうのは、感情をたかぶらせる多彩な性格のほうであって、それはそのような性格が、真似て描写しやすいからにほかならないのだ」(604E1-605A5)

²² Smith, 156-159.

²³ Smith, 159, n.27.

²⁴ Murphy (124, n.1)にも同様の指摘がみられる。

ここで詩人は「本性的には(πέφυκέ)」 「思慮ぶかく平静な性格」に向かうことはないと言われている。けれども、詩人がそのような性格にしか向かうことがあり得ないとまで言われている訳ではない。「思慮ぶかく平静な性格」は、「それを真似て描くのは容易ではなく、またそれが描写された場合にも、そうやすやすと理解されるものではない」と言われているように、詩の対象となることが絶対により得ないと言われている訳ではないのだ。

実際『国家』VII巻で教育が向け変えの技術だと規定される際には、知識という認識能力が向かう対象はアイデア以外のものからアイデアへと向け変えられると語られている(518B7-D8)。そこでは、知識という認識能力は神的なものとして始めから魂の中に内在していること、またどんなときにも失われることがないことが確認された上で、向け変えのいかんによって有用・有益なものにも無益・有害なものにもなると語られている(518C4-519A1)。つまり以下の引用が示しているように、知識という認識能力はその能力を保持したまま、アイデアにも感覚的な事物にも向けられることがあり得るのだ。

「それとも君は、こういうことにまだ気付いたことがないかね——世には、『悪いやつだが知恵はある』と言われる人々がいるものだが、そういう連中の魂らしきものが、いかに鋭い視力をはたらかせて、その視力が向けられている事物を鋭敏に見通すものかということに(ὡς δορὶ μὲν βλέπει τὸ ψυχάριον καὶ ὀξέως διορᾷ ταῦτα ἐφ' ἅ τέτραπται)。この事実は、その持って生まれた視力がけっして劣等なものではないこと、しかしそれが悪に奉仕しなければならないようになっているために、鋭敏に見れば見るほど、それだけいっそう悪事をはたらくようになるのだ、ということを示している」(519A1-5)

「しかしながら」とぼくは言った、「そのような素質をもった魂のこの器官が、もし子供のときから早くもその周囲を叩かれて、生成界と同族である鉛の錘のようなものを叩きおとされるならば、(中略)もしそういったものから解放されて、真実在のほうへと向きを変えさせられるとしたならば、同じ人間のこの同じ器官は、いまその視力が向けられている事物を見るのとまったく同じように、かの真実在をも最も鋭敏に見てとることである」(τὸ αὐτὸ τοῦτο τῶν αὐτῶν ἀνθρώπων ὀξύτατα ἑώρα, ὡσπερ καὶ ἐφ' ἅ νῦν τέτραπται) (519A7-B5)

けれどもこのような仕方では知識という認識能力がアイデア以外のものを対象にとることを認めると、実際のところ知識と思わくとを厳密に区別しきれるのか疑問が生じるかもしれない。しかし逆説的ではあるが、むしろその対象が様々なものであり得るからこそプラトンは、認識能力と対象との間の「本性的な」対応関係に注意を向けたのだと考えられる。このように考えたとき、知識という認識能力が「あるもの」に関わるということは本性的な関係であって、「ありかつあらぬもの」に関わることは本性的ではない、いわば二次的な関係として認められるだろう。

本稿が論じてきたことが正しいならば、見物愛好家たちが知識ではなく思わくを抱いていることは、単に認知状態の相違によって論じられているのではなく、認知状態を成立させる認識能力の違いによって明らかにされている。そして認識能力の区別は認識能力の本性的な対象の相違によって与えられている。そのため見物愛好家たちが彼らの愛好する対象について知識をもっていないとされる理由は、彼らが知識という認識能力の本性的な対象を認めず愛好しないことに起因すると言えるだろう。つまり見物愛好家たちは、彼らのもつ認識能力が極めて弱いものであることを理由に、愛好するもろもろの事物について知ってはいないと批判されているのだ。

6. 知識と思わくの区別

知識と思わくを認知内容だけではなく認識能力においても区別することの意義について、最後に簡単な考察をしたい。Smith は知識と思わくを異なる認識能力として区別したプラトンを現代の知識論の文脈に位置づけて、ある種の因果的な信頼性主義者 (causal reliabilist) であると論じている。哲学者と見物愛好家が同一の事柄について判断をしたとき、前者の判断が知識となり後者の判断が思わくにとどまる理由は、それぞれの判断を形成する認識能力がそもそもまったく異なることにある。(1) 哲学者の判断が知識である根拠は、見物愛好家のそれとは異なり、信頼出来る認知的プロセス・能力が個々の判断を形成するからであり、(2) この認知的プロセス・能力の信頼性は、アイデアという対象に関わることによって与えられている。ここから Smith は、(3) 哲学者の判断はアイデアとの接触によって因果的に引き起こされたものである、と結論付ける²⁵。

本稿のこれまでの考察は Smith の(1)と(2)を擁護したものだが、(3)につ

²⁵ Smith, 161-163.

いては否定的である。哲学者が感覚される事物について判断をする場合には、認識能力の対象は感覚される事物であり、個々の判断がイデアとの接触によって因果的に引き起こされるとまで考える必要はない。そのためプラトンでもし現代の知識論の文脈に位置づけるならば、信頼性主義者、あるいは広い意味での徳認識論者 (virtue epistemologist) として位置づけられるだろう。徳認識論にはさまざまな立場があるがそれらに共通するのは、正当化といった信念や命題の性質ではなく、知識をもつ主体の性質 (知的徳) に関心を向ける点である。ただし知的徳の内実については、Goldman の信頼性主義に近い立場をとり、信頼出来る信念を形成する機能として自然主義的にとらえる論者もいれば、知的誠実さや公正といった倫理的な徳に類似した性格的特質としてとらえる論者もいる²⁶。

近年、プラトンにおける知識をいわゆる「正当化された真なる信念」に相当する現代的な知識ではなく、理解であるとみなすことは古代哲学を専門とする研究者たちの間で支持を集めている。プラトンが定義的知識 (イデアについての知識) を重視していることはその根拠の一つとして挙げられる²⁷。この点を踏まえると、プラトンにおいて知識を形成する認識能力がイデアという対象によって特定されていること、その信頼性がイデアによって保証されていることは、プラトンが定義的知識を重視し対象についての理解を追求していたことに起因するとも言えるかもしれない。もしそうであるならば、知的徳の内実をどのように考え、また特定するのかについて、プラトンの立場は現代の知識論においても一つの参考になると言えるだろう²⁸。

(京都大学・博士課程)

参考文献 (本稿で言及されたもののみ)

- Annas, J. 1981. *An introduction to Plato's Republic*. Clarendon Press. Oxford.
- Baltzly, D. 1997. "Knowledge and Belief in Republic V". *Archiv fur Geschichte der Philosophie* 79. 239-272.
- Fairweather, A. & Zagzebski, L. 2001. *Virtue Epistemology: Essays on Epistemic*

²⁶ Fairweather & Zagzebski, 3-5.

²⁷ Burnyeat, 187.

²⁸ たとえば徳認識論の支持者の一人である Zagzebski は、知的徳という概念が理解や知恵といった近年の認識論が軽視していた概念をも包摂するものとみなしている (43-51)。

- Virtue and Responsibility*. Oxford University Press.
- Fine, G. [1]. 1978. "Knowledge and Belief in *Republic V*" in *Plato on knowledge and forms: selected essays*. Clarendon Press. Oxford. 66-84.
- [2]. 1990. "Knowledge and Belief in *Republic V-VII*". in *Plato on knowledge and forms: selected essays*. Clarendon Press. Oxford. 85-116.
- Gonzalez, F. J. 1996. "Propositions or Objects? A Critique of Gail Fine on Knowledge and Belief in *Republic V*". *Phronesis* 41. 245-275.
- Halliwel, S. 1998. *Plato: Republic 5*. Aris & Phillips Ltd. Warminster.
- Hintikka, J. 1973. "Knowledge and Its Object in Plato". in J. M. E. Moravcsik(ed.). *Patterns in Plato's Thought*. Reidel Publishing Company. Dordrecht-Holland. 1-30.
- Santas, G. [1]. 1973. "Hintikka on Knowledge and Its Objects in Plato". in J. E. Moravcsik(ed.). *Patterns in Plato's Thought*. D. Reidel Publishing Company. Dordrecht-Holland. 31-51.
- [2]. 1990. "Knowledge and Belief in Plato's *Republic*". in P. Nicolacopoulos (ed.). *Greek Studies in the Philosophy and History of Science*. Kluwer. Dordrecht. 45-59.
- Smith, N. D. 2000. "Plato on Knowledge as a Power". *Journal of the History of Philosophy* 38. 145-168.
- Vlastos, G. 1965. "Degrees of Reality in Plato". in *Platonic Studies*. Princeton University Press. Princeton. 58-75.
- White, N. P. 1976. *Plato on Knowledge and Reality*. Hackett Publishing Company. Indianapolis. Cambridge.
- Zagzebski, L. 1996. *Virtues of the Mind: An Inquiry into the Nature of Virtue and the Ethical Foundations of Knowledge*. Cambridge University Press.
- 岩田直也. 2009. 「知の個別性と全体性—プラトン初期・中期対話篇における技術と能力の対象概念について」. 『古代哲学研究室紀要』. Vol. XV. 26-50.